

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

特集 白山国立公園指定30周年記念講演会

第20巻 第2号



剣ヶ峰

剣ヶ峰は先号の表紙で紹介した御前峰と同様に新白山火山の噴出物からなりますが、でき方も年代も異なります。この峰は御前峰の稜線を形成した大崩壊の後に、その崩壊跡の凹地に形成された火山体で、年代は今から約2,900年前頃と考えられています。その際に流出した溶岩は東方の大白川付近まで達しています。斜面は急で険しく、植生もほとんどみられないのは、この峰の誕生が新しいためです。国土地理院発行の地形図には剣ヶ峰の標高は記されていませんが、最近、国土地理院から出版された『日本の山岳標高一覧-1003山-』（1991年刊）には、新たに写真測量された標高値として、2,684mの値が載せられています。

白山国立公園指定30周年記念講演会

白山国立公園が指定されてから今年で30周年を迎えました。石川県では、30周年を祝って各種記念行事を開催しています。その一環として、記念講演会を開催しました。

◎開会・挨拶 白山国立公園指定30周年記念事業実行委員会
会長 齊藤晴彦（石川県環境部長）

◎講演 I 加藤幸子（芥川賞作家）
「白山の自然に寄せて」

◎講演 II 瀬田信哉（環境庁審議官）
「21世紀の国立公園」

（司会・進行） 石川県白山自然保護センター所長 米山競一



-
- *開催日時：平成4年7月23日（木） 午後6時30分～午後8時30分
 - *開催場所：石川県立社会教育センター 4F講堂（金沢市本多町）
 - *主催：白山国立公園指定30周年記念事業実行委員会
（環境庁・石川県・白峰村・尾口村・吉野谷村・白山観光協会）
 - *参加者：350名

白山の自然に寄せて

加藤 幸子（芥川賞作家）



白山のブナ林

今、御紹介を頂きました加藤です。「白山の自然に寄せて」という題にしましたけれど、実はまだ、白山の頂上まで登ったことがありません。ただ、7・8年前に白山林道の三方岩岳山頂へ（白山を）見に行きまして、その時は、カモシカにも出会うことが出来ました。それから4年程前に、市ノ瀬からチブリ尾根のブナ林を見に行きました。その時は、11月だったものですから朝方は雪が散らつく程の寒い時期でした。山の上の方に行きますとかなり雪が深くなって、だいたい1,400mぐらいの所までは長靴を履いて行けましたけれど、その上は「ちょっと装備がなくては行かない」ということで戻って参りました。そこはなかなか優れたブナの純林がありまして、印象として今でも大変鮮やかに思い出されます。

その時、どうしてブナ林を見に行ったかと言いますと、実は、「石川の自然・ブナ林」という、写真と文章が一緒にある非常にきれいな本が出来てますが、この本の序文がわりにチブリ尾根紀行を書いた訳です。

その時書いた紀行文の、純林から出た時の一部分を紹介させていただきます。自分の作品を読むのは恥ずかしいんですけども、これは石川県環境部自然保護課が監修して、橋本確文堂から出ているので、PRを兼ねてその時の印象を読んでもみます。

『尾根に出ると、がらりと雰囲気がちがった。雑多な印象が薄れて、簡素な静寂が広がった。私たちはブナの純林に包まれたのだ。やや色の濃い幹の、様々の大きさの、ということは育った年月も様々のブナの木が、見わたすかぎり続いて立っている。

ここは白山の石川県側を代表するブナ原生林なのだそう。ブナの純林には、清潔な明るさが漂っていた。私は能舞台を連想した。それはたぶん新雪のブナ林という装置のせいだったろう。樹液のあふれ出る春のブナ林や緑に統一された夏のブナ林や祭りのような秋のブナ林なら、私にまた別の連想をもたらすだろう。力強さや神秘感にはやや欠



白山チブリ尾根のブナ林

けるけれども、ブナ林には詩的幻想を舞いあがらせる、軽やかさがいつも満ちている。』

このような感想でした。本当に美しいブナの森でした。私は北海道生まれなので、自然は大好きですけど、とりわけ雪景色に非常に心ひかれる所があります。雪景色とブナ林の取り合わせと言うか、ブナ林が雪に引き立てられた風景が、とても良かったのだらうと思っています。

山登りの楽しみ

自分の足で白山を歩いたのは、2回ほどなのですが、白山という名前は、これよりもずっと前から私の耳には、大変親しく響いている名前でした。

それはどういうことかと言いますと、私はかなり昔から山登りがとても好きでした。最初に登ったのは、高校生の時、北アルプスの西穂高と槍ヶ岳でしたが、それから大変山が好きになったのです。北大の学生時代、札幌におりました時には勉強はそっちのけで、夏も春も秋も冬もしょっちゅう山に登りました。



ハクサンフワロ

当時は、今皆さんが思われるような山登り人口ではなくて、山に登る人は少なかった上に、私のような女の学生、山女は滅多に見られなかったものですから、いたる所で珍しがられました。しかし自分ではそんなことは全然考えないで、ただ単に山が好きだから登ってなに過ぎないんです。

それでもやはり、私は普通の山男と違うところがあった様な気がします。普通、山男と呼ばれる人は、「山がそこにあるから登る」という有名なヒラリーの言葉でしたか、そういう感じで、とにかく頂上を目指すという人が多かったんですが、私はその頃から、頂上を極めることも楽しみの一つではありましたが、それよりも途中で美しい景色を眺めたり、あるいは山の生き物に出会ったりする方が、とても楽しみでした。とりわけ好きだったのが、高山植物のお花畑に寝そべってぼんやり過ごしてる、そういう時間が私にとっては、とても貴重で楽しい時間でした。

今は登山者が非常に多くなってきてますので、そういうことをみんながすると、お花畑はたちまち荒れ果ててしまいますから、きちんと規制されなければならないと思いますけど、当時は、一週間ぐらい山の中に入っても、誰にも会わないような状態でした。特に北海道の山では、人に会うよりはヒグマに会う方が多いくらいの時代でした。ですから、お花畑で贅沢に寝転がって、昼寝が出来たと言うことだったんです。

当時は山小屋も殆どありませんし、山を歩くといっても途中で露営をする訳なので、荷物がものすごく大きくなってしまいます。その大きな荷物の中に、必ず高山植物図鑑、正式の名は『日本高山植物図鑑』という本を入れておきました。それは今でも出ているかもしれませんが、北隆館という出版社から出て、武田久吉先生（最近亡くなられたと新聞に出てました）という、植物学者が書かれた図鑑なんです。いつでも私の荷物の中に入れ

て、お花畑に出会うと、図鑑を開いて名前などを調べておりました。今でもその図鑑は、私の本箱の中にしまっています。

私が歩いたのは大学のあった北海道の山と、それからあと長野県の北アルプスの山が多かったんですが、それぞれの山で、お花畑に行って、高山植物図鑑を開きますと、ハクサンと言う言葉が頭に付く植物名が沢山あるわけです。例えば、ハクサンチドリとか、ハクサンコザクラ、ハクサンシャクナゲ、ハクサンイチゲ、ハクサンフウロですね。ハクサンフウロってというのは、とても何かきれいな、名前としても、「風の露」って書くんでしょうか、素敵な名前だと思います。



ゴゼンタチバナ

ハクサンフウロやハクサンボウフウのように、上にハクサンと言う名前が付く植物が沢山あります。また最近知ったんですが、高山帯よりもちょっと低い所に、ゴゼンタチバナと言う小さな可愛い花が咲く草がありますが、これも実は白山の御前峰に由来するそうですね。だからそういうものも入れれば、日本アルプスとか北海道の山にも、随分沢山ハクサンという名前に由来する高山植物、あるいは山の植物があるわけです。ですから、「白山ってどんな山なんだろう」と当時から不思議に思ったり、それから植物の名前を調べるたびに出てくる白山という名前を、私は大変親しく感じておりました。

ハクサンフウロやハクサンボウフウのように、上にハクサンと言う名前が付く植物が沢山あります。また最近知ったんですが、高山帯よりもちょっと低い所に、ゴゼンタチバナと言う小さな可愛い花が咲く草がありますが、これも実は白山の御前峰に由来するそうですね。だからそういうものも入れれば、日本アルプスとか北海道の山にも、随分沢山ハクサンという名前に由来する高山植物、あるいは山の植物があるわけです。ですから、「白山ってどんな山なんだろう」と当時から不思議に思ったり、それから植物の名前を調べるたびに出てくる白山という名前を、私は大変親しく感じておりました。

実は明日から私は、「今度こそ白山の上まで行ってみよう」と計画をしております。梅雨も明けましたようなので、頂上まで行かれたら、又いろんな白山に因んだ植物を見られると思って、楽しみにしています。そんな訳で高山植物を通じて、私は白山に非常に親しい感じを持っていました。

自然保護の仕事に携わって

今回初めて、白山国立公園の指定30周年だと知りました。指定前後の私の体験、また、その頃の日本の自然の状況などをちょっと思いつくままに、お話させて頂こうかと思っています。

30周年ですから、白山が国立公園に指定されたのは、1962年ということになりますね。ということは、このあと瀬田さんがお話しをなさいますけど、環境庁もなかった時代です。環境庁はその9年後の1971年に出来てますから、環境庁はなくて、こういう関係はどこでやっていたかと言うと、厚生省で取り扱われていたのです。厚生省に国立公園部というのがありまして、そこで国立公園行政をやっていたわけです。

私は1960年、ちょうど白山が国立公園に指定される少し前、何をしていたかと申しますと、偶然なんですけど、厚生省の国立公園部の外郭団体に(財)日本自然保護協会という団体がありまして、そこに勤めておりました。

今でもその日本自然保護協会という団体はずっと続いてまして、会員も今は2万人近くありますし、職員の数も20人以上の大所帯になっております。けれど、その頃の日本自然保護協会の職員は私だけでした。初代の職員でした。創設されて間もない頃で、財団法人

に1962年に確かなったので、それで職員をたった一人入れようということになったようなんです。事務所を借りるお金もなかったものですから、厚生省の国立公園部の一角を屏風みたいなもので仕切りまして、小さくなって間借りさせてもらった状態でした。

その頃の国立公園行政というのは、どっちかという利用とか観光とか人間を集める方面に向いておりましたので、自然保護というようなことは、足を引っ張るような感じだったのかも知れませんが、あまり居心地がよい感じではありませんでした。ただ、勤めて二年目ぐらいですけれども、1962年の3月頃には、やっと今も事務所のある虎ノ門に移転することが出来ました。やっと居候の身分から独立して、自力で自然保護の仕事をするようになったわけです。

会員といってもその時は一握りぐらいの人数しかなくて、自然保護に関心のある人っていうのは本当にその程度だったんです。どんな方がいらしたかといいますと、やっぱり生物学の関係の方、それこそさっきの高山植物の博士の武田久吉先生、私が高校の時、参考書を愛読した下泉先生とか、そういう生物学の方々ですね。あるいは登山家の方とか、山とか自然の随筆を書かれる方達とか、山岳画家や日本画の方とか、そういう方達为中心でした。人数は少ないですが、そういう方々が熱心に協会に出入りなされて、会議などをよくなさっていました。

私しか職員がいませんので、ものすごく大忙しでした。会議がありましたら議事録の作成をしたり、お茶を出したり、あらゆることをしたんですが、やはり一番力を入れたのは『自然保護』というリーフレットを発行したことです。白山が国立公園になった頃、私はそういうことをしておりました。

実はその頃尾瀬にダムが出来るはずだったんです。協会内で尾瀬の電源開発問題がすごい話題になって、先生方が大反対なされて陳情書を出したり、リーフレットで特集したり色々大変でした。尾瀬は幸いダム化をまぬがれて今の状態になってます。

確か白山もですね、私はよくわかりませんが白水の滝という滝があるらしくて、その白水の滝がどういう理由か、保護をしなくちゃならないということで、話題になったことを覚えております。ちょっと前後がはっきり記憶にないものですから、どうして保護しなければならなかったのかということは覚えていません。けれど、そのころ白山という地名も出てきたのは確かです。

当時の日本の社会は、いわば高度成長の坂を登り始めた頃だったんです。それで自然保護という言葉は、今のように毎日毎日マスコミに取り上げられるどころか、マスコミの人に話しても意味が通じないような状態でした。政治や行政関係の方々はもとよりですが、一般の人でもですね、自然の価値、自然を残さなければならないということは全く無関心でした。ですから、私の勤めていた協会の会員の人が熱心に陳情したりですね、自然保護という言葉とか、自然の大切さを伝えなければならぬということで、無料でリーフレットを全国の中学校に発送してたんです。出る度にそれがどうなってしまうのか、ちゃんと読んでくれたのか疑問なんです。残念なことには、全体に日本の社会がそういう状態だったので、努力した割に強力な歯止



講演会風景

めにはならなかったのかもしれませんが。

私は、3年半ぐらいで(協会の会員ではありましたが)勤めは辞めましたが、それ以後ものすごいスピードで、産業開発とか観光開発が次々に進められていった訳です。そうすると反動的に、私が勤めていた頃のどちらかというとのんびりした形の、自然保護の活動じゃなく、自然を破壊する力が余りに大きくなってしまったものですから、その力に対抗するために非常に激しい自然保護運動が全国でまきおこった、そういう時代に入っていったということです。

その一歩手前で、私が自然保護の仕事をしていた頃に、白山が国立公園に指定されたということだと思えます。激しい開発の嵐が、全国を覆うちょっと前に、白山が国立公園に指定されたということは、白山にとっては幸せなことだったのではなかろうかと思えます。白山も古くから信仰の山として、人々から大事にされてきたとは思いますが、それだからといって破壊は免れ得たかということ、そうははっきり保証されなかったかも知れないですね。



信仰の山—白山

自然の価値とは

勤めを辞めたのは1963年なんですけど、それ以後もずっと自然に関わり続けて暮らしておりました。子供の頃から生き物が大好きで、野外で出会う野生の植物や昆虫などを友達のように思っておりましたが、やはり自然保護協会というところに勤めて、自然保護という言葉と意味を他の一般の人達よりも先駆けて知ったという事は、私の人生の一つの大きな転機になったのではないかと思います。それまでは、学生時代を含めて、もっぱら自然を楽しむとか利用する事ばかり考えて暮らしていたんです。自然の力と言うのは非常に強いから、人間が自然を楽しむことによって、自然が駄目になってしまうということはありませんかと思ってたんです。特に北海道育ちなものですから、北海道の自然は当時、本当に森と湖の国という感じなんです(今は全然違いますが)。そこを人間が必死の努力で開拓して、自然の強力な力と闘いながら、切り開いていくという土地柄でしたから、自然の方がずっと強いと思いつけていた訳です。

でも、きちんと日本の色々な自然の状態のデータを集めてみたり、それからさらには、ドイツなど宮脇 昭先生(横浜国立大)がもたらしてくれた海外の情報とか方法論を聞いたりしてますと、人間が自然に対して限度以上の力を振るうときには、自然は必ず無くなってしまうのだという事実が、自然保護の仕事を通してはっきりわかったと思います。

つまり、森や水辺や草原、いわゆる自然をよりどころにしている様々な生物達が、生きていく場所を失うことであるということなんです。それがわかった訳です。そうしますと、私は子供の頃から本当に生き物が大好きで、周りにそういうものが居なければ落ち着かないほど生き物好きな人間ですから、自然破壊について考えた時に、自分の身がそがれるよ

うに非常に悲しい出来事と感ぜずにられません。

私はその後も、子供を育てたり、小説を書く勉強をしたりする傍ら、ずっと動植物と付き合いを続けてきました。特に20年前、東京の大田区という東京湾に面した区に住んでいたときに、大田区の自然の好きな親子や、若い人達と一緒に、自然観察グループを作りました。今は顧問になっておりますけど、随分長い間、代表事務局をしてグループの運営にたずさわりました。とりわけ自然観察の活動の傍らに、1975年から10年くらいに渡って、東京湾の埋立地の野鳥生息地を公園にしようという運動を続けまして、自分としては役に立つかどうかわからなかったのですが、そのリーダーを務めたりもしました。それで、やっと野鳥生息地が、3年前に東京湾野鳥公園として正式にオープンを致しました。もし私たちがこの運動をしなかったら、計画通り別の建物がその場所に建ってしまって、野鳥達は追い出されてしまっただろうと思います。幸い、東京都との長い交渉の結果、都側も自然を残す価値を理解し、自然の公園が出来た訳です。

私の仕事は小説を書くことなんですが、普通の作家とは違う仕方をしているのだと自分では思っています。それは、20代の時のそういう自然保護の仕事を通じて、自然の価値の重要性というものを理解することが出来たということですから、もうちょっと遡って考えてみますと、身近なそういう生き物達を友達のようにしていた子供時代とか、あるいは山登りをしながら高山植物や野生の動物達の生態に触れていた学生時代とか、そういう体験がなかったら、やはり現在の私はあり得なかったのではないかと思います。今の私を育んだのは、そういう自然体験であったと思っております。

白山は国立公園ですから、もちろん色々な価値があると思います。一つは他の山と違って、歴史的・宗教的な意味を持っている古い文化遺産であるということもあるし、景観的に非常に美しいということもあります。でも山麓から山頂まで非常に豊かな植物相があるし、それから、沢山の野生動物が生息していること、そこがやはり大事なところではないかと思っております。

この多様性に満ちた自然がこのまま手を加えられずに残されていく限り、私がかつてそうであったように、白山の自然から喜びと価値を汲みとる若い人達が、必ず次々と現れてくると信じております。そして、そういう人達が増えてくれば増えてくるほど、今はちょっと絶望的に感じられているような、地球全体の自然環境の未来にも希望が持てるのではないかと、そんな気がします。ですから白山を大事にすることは、地球全体を大事にすることにもつながってくるのではないかと思います。是非、今のままのような美しい白山がずっと残っていきますよう願っています。明日は白山の(山の)様子を楽しみながら、頂上に登って行きたいと思っております。どうもありがとうございました。

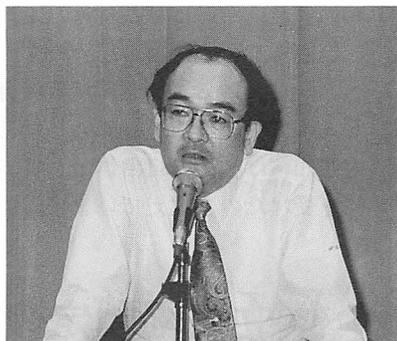
(文責：白山自然保護センター)



白山の豊かな自然を象徴するブナ林

21世紀の国立公園

瀬田 信哉（環境庁審議官）*



国立公園行政とのかかわり

私の前に、北海道大学の先輩である加藤幸子さんからも話がありましたけれども、私が環境庁の前身である厚生省に入ったのは、昭和36年12月でした。その月には私一人だけ入ったのですが、先輩に厚生省のはずれといいますか、倉庫みたいな所に案内されました。石神さんという自然保護協会常務理事の方が、奇声を発するような人だったんですけれども、「お、なんだ君も北大出身か。じゃ、君の先輩がここに居るよ。」と紹介されたのが、加藤さんだったんです。

昭和36年の12月に厚生省に入りましたから、本年の7月1日、環境庁が出来て21年目ですけれども、勤続30年表彰というのを貰いました。この表彰はもうそろそろ辞めなきゃならんという印なんですけれども、白山国立公園は今年で30年になっても、辞めるという訳ではなく、永遠に続きます。今日お話ししたいのは、「21世紀の国立公園」ということですけれども、そのためには20世紀の国立公園がどうであったかということが一つのテーマになろうかと思います。そのうえで21世紀のためにいろんな準備をしなければならないということで、21世紀には、こうあって欲しいということをお話ししたいと思っております。

白山と私の縁は、昭和42年に中部山岳国立公園の立山でレンジャー（管理員）をやりましたから、白山にはその時から登っておりました。上高地のレンジャーをした後、今の国土庁の前身である中部圏開発整備本部にいて、中部圏の保全区域、とくに厳正に自然保護する地域はどこかと探していました。私は、中部山岳は知っておりましたし、前に南アルプスのレンジャーもやりましたが、厳正自然保護地域を選ぼうとすると、まず「白山」じゃないかと考えました。

「白山に行きたい。」と石川県庁に言いましたら、「どういう所へ行くんですか。」と聞くもんで、「いわゆる白山の頂上じゃなくて原始林の中を歩きたい。」と答えたものです。環境庁なり厚生省の相手になるのは、当時なら観光課ですが、中部圏開発整備本部には、県庁の企画部が相手なんです。それで、「どういう格好で出張にこられるんですか。」と聞くので、「当然山靴でリュックサックですよ。」こう言うと、企画部の人は、「私らは、そういう所へは行ったこともないし、ちょっとご案内出来ません。」と言われました。当時観光課に、私の2年後輩の今井君がいて、彼と2人で山を歩いたという記憶がございます。

この講演会の案内プロフィールのところで、私が『自然ふれあい新時代』という本を書いたように紹介して頂いて非常に光栄ではありますが、そうではありません。計画課長の

*平成4年9月1日付で退官。

時に、名前だけは私が付けたんですけども、著書という意味ではありません。この本はぜひ読んで頂きたいと思います。また、その頃2年間ほど、自然公園の利用はいかにあるべきかについて、自然環境審議会の中に委員会を持ちました。その会を持つにあたって、5人の方々に講演をお願いしたんです。その中の一人が中西陽一石川県知事でございます。中西知事は「地方自治体として国立公園に望むこと」という講演をされまして、非常に感銘を受けたのを覚えています。

国立公園制定の歴史

とりあえず21世紀の国立公園の話になる前に、20世紀の話をちょっとさせて頂きたいと思います。日本の国立公園を、私どもは地域性の国立公園というふうによく言います。アメリカやカナダの国立公園あるいはアフリカの国立公園とかは、営造物的国立公園というふうに言っています。これはどういう事かと言いますと、例えば兼六園も営造物的公園なんです。日比谷公園なんかもそうです。都市公園はその公園の目的だけに、その土地を所有するとか、地上権等のあらゆる権利を持って公園目的だけに管理している公園、これが営造物的公園なんです。アメリカでも国立公園の中に私有地がないわけではありません。しかしそういう所をこつこつ買い取って、全域100%に近い所を、国立公園として内務省のナショナルパークサービスと呼ばれる国立公園局が管理をしている訳です。従いまして、そこで道路を作ることも保守することも、あるいは犯罪があるならばその犯罪者を逮捕する権利も、全部ナショナルパークサービスの職員であるレンジャーがやっております。他にも自然解説のような事を、ナチュラルリストの人達がやるというのが、アメリカの国立公園のシステムなんです。

一方、日本は古くから、土地が非常に細やかに分割されて、色々な利用がされている訳です。白山で言えば白山信仰という形で神社が奥山の相当部分を持っておられるだろうし、加賀藩の藩有林は今の国有林でしょうが、林業上の目的で木を伐ったり伐らなかつたりしている。そういう所では全部公園目的のために土地を取り上げるとか、買い上げるとかして、そこを国立公園にすることは、容易なことじゃありません。そういう土地利用が進んだり開拓・開発の歴史が古い所では、単純に自然を守ったり、公園の利用を考えたりすることがなかなか出来ませんので、あるところに線を引いてしまします。その線を引いた中にいくつかのグレードをつけ、開発行為に制限を加える訳です。

「高さ13m以上の建物は駄目ですよ。」とか、あるいは木を伐るといっても、択伐といって、「材積が100あるとすれば30はいいけれどあとの70の木は伐らないで残しなさいよ。」とか、区域によれば、「何本かに1本は切ってもいい。」とか、そういう制限を加えるというのが、「地域



講演会風景

性の国立公園ゾーニング」と言っています。都市計画でもそれに似たことがあります。たとえば「第一種住居専用地域であれば建ぺい率（建築面積の敷地面積に対する割合）はこれだけ、容積率はこれだけ、第二種住居専用地域であればこれだけ。住居地域に工場は入らないように。」というようなことがありますけれど、こういった方法がゾーニング方式と言われているものです。日本の国立公園が初めて指定されたのは昭和9年ですけれども、法律（国立公園法）ができたのは昭和6年です。アメリカで国立公園ができたのは、イエローストーン国立公園の1872年なんです。アメリカでは、1800年代にナショナルパークが出来てましたけれども、日本で国立公園が指定されるのは1934年なんですね。その時どういふ所が国立公園になったかと言いますと、最初は雲仙、霧島と瀬戸内海で、昭和9年の3月16日だったと思います。そして、同じ年の12月4日に阿寒、大雪山、日光、中部山岳、阿蘇の5つが国立公園に指定されました。それから昭和11年に吉野熊野と十和田が国立公園になる訳です。これが戦前の国立公園です。

雲仙、霧島と瀬戸内海という最初のグルーピングは、みんな人間との関わりのある歴史を持っているところで、いわゆるワイルドと言いますか野生的・原始的な自然ではないんです。雲仙はその前から県立公園ということで、国立公園に指定された時には既にゴルフ場すらあったんですね。パブリックのゴルフ場としては今一番古い9ホールのゴルフ場やテニスコート、外国人のためのホテルが数軒、日本人の湯治客の人達の旅館もあるというような町を形成していた。これが国立公園になった訳です。霧島は割合に原始的な自然の豊かな所もあるんですが、高千穂の峰には天孫降臨という皇国思想がありまして、紀元2600年事業として戦前には道場が出来、そこで鍛錬をするというのがこの国立公園のスタートになっています。瀬戸内海は厳島神社ですとか屋島ですとか、いわゆる名所旧跡と言われるものを含んだ非常に人間くさい国立公園です。

続いて昭和9年の12月に指定されたのは、阿寒、日光などです。日光には、東照宮とか中禅寺湖畔の外国人達のリゾートや東京の人達の別荘も含まれてはいますが、その奥に奥鬼怒、鬼怒沼があり、さらに尾瀬まで含めて国立公園にしたということでは、非常に原始的な自然地域だと思います。それから中部山岳も立山や後立山から上高地、乗鞍まで含めて国立公園になる訳です。実は大正11年に国立公園の予定地と言いますか候補地にあげられたのが16カ所ありましたが、初めの指定の中でその候補地になかったのは、大雪山だけなんですね。それ以外は全部候補地になっていました。どちらかと言うと、景勝地中心の国立公園という考え方から、大雪山はエントリーされていなかったのが指定されると言う点では、大風景地といったものを国立公園にするということになってまいります。

しかし、雲仙、霧島、瀬戸内海や日光というような所では、いわゆる昔からの景勝地を国立公園にしている。ドンチャン騒ぎも、場合によるとそういう所ではあるんですね。初めからアメリカ型の国立公園を狙ったのではなく、そういう遊興の地も含めて、そこにある景勝地を公園にするということでした。従って、公園の中で非常に自然を大切にしている原始的な所と、遊興の地が混在している国立公園であった訳です。高邁な思想で自然を保護しながら原始的な利用をするといいま



◎大雪山国立公園(撮影：佐藤武史)

すか、アメリカの大統領ですら、山にこもって「さて政策をどうする。」というような所が国立公園と思う訳ですが、日本人は始めからドンチャン騒ぎをする場合は、自然公園であろうと名勝であろうと一緒にしてしまうことがあった訳です。

明治時代の外国人のお抱え学者でチェンバレンっていう人がいて、「日本人はシーン(SCENE)、つまり景色には非常に感嘆するけれども、シーナリー(SCENERY：風景っていいですか景観っていうんでしょうかね。)には感嘆しない。」と書いています。皆様も何かいい風景があるとすぐに写真を撮ろうとか、カメラがなくても(両手の指で四角い枠を作って)こう見ますよね。どこに何がおさまっているかと、ワンショットの風景に非常に興味を持たれる。従って、赤城山、妙義山、榛名山、戸隠とか奇石奇峰のあるような山を愛でるといような事がありますけれども、シーナリーっていいですか大風景、ようするに首をぐるっと回し、その中に入っていくという風景には余り感心しないという癖、伝統があったんでしょう。絵はがきとか額縁の風景文化というのでしょうか。

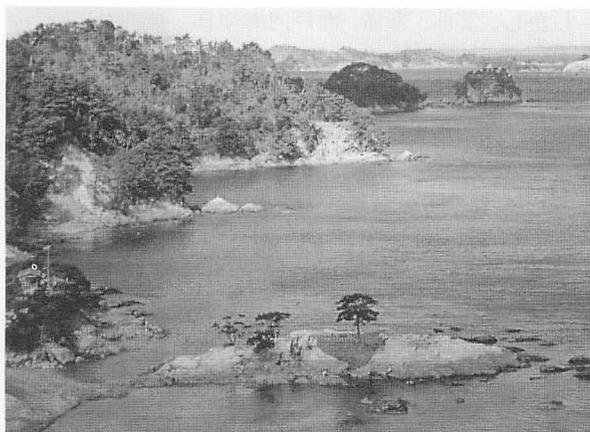
阿寒に居た時に、雑誌「旅」の編集長で、岡田喜秋という人の随想を読んで思ったんですけれども、摩周湖がありますね、バスから降りた人は摩周の第3展望台へ駆け上がって、摩周岳とカムイッシュという小さなホクロのような島と、それが写す湖面とを見て、「ファー」という訳です。ところがその背景、後ろには屈斜路湖という大きなカルデラの景観があり、硫黄山という硫気活動をしている山があるんですが、その後ろの方の風景には全然関心を示さない。「ある一つの風景をワンショットで見ると、回りにあるもの全体を見ての大自然というものを感動しない。」というのが、どうも日本人の性質とでも言えるんじゃないかと思いました。

戦後の国立公園

戦後一番最初に指定されたのは伊勢志摩国立公園なんです。これだけは面白いことに、いわゆる審議会(昔は国立公園審議会)にかかってない公園なんです。ぜんぜん審議会の手続きだとか調査がないままに国立公園になったというのが、伊勢志摩国立公園なんです。ですからゾーニングという、普通はこの風景から公園にして、どこは公園でないという自然の風景の変わり目で境界があるんですけど、「伊勢志摩は鳥羽市から先は全部国立公園、追って守る所は後で決めなさい。」と言うので、町村単位で国立公園になった所ですから中に役場所在の町もある訳です。

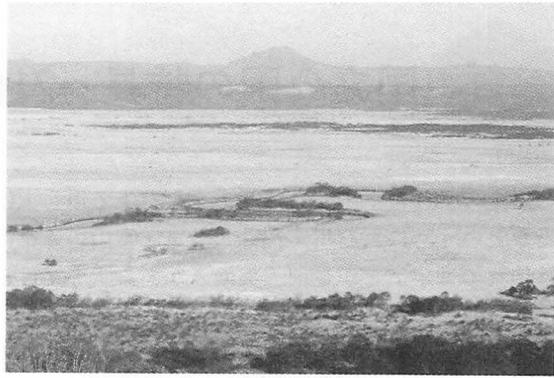
「伊勢志摩国立公園であんなに(工事等)出来るのにうちの公園は何故こんなに規制が厳しいんや。」という話が比較論として出てくわけですね。「あそこは厳しくてうちは緩い。」のならしめたものなんです。が、「うちは厳しくてあそこは緩いのは何故だ。」これまた日本人としては公平論という話になってしまいます。

戦後になって、たとえば雲仙は



◎伊勢志摩国立公園(撮影：西山和夫)

天草とくっついて雲仙天草国立公園になります。霧島は屋久島、桜島、指宿ですとか、いろんなものをくっつけて霧島屋久国立公園になります。阿蘇は元々そうだったんですが、大分県側が「くじゅうという名前もちゃんとつけてくれなければ、大分県は霞んでしまう。」と言うので、阿蘇くじゅうになります。そういう風にどんどん名前がくっついて、インフレのようになってしまいます。



◎釧路湿原国立公園(撮影：棟方俊一)

と同時に山陰海岸とか陸中海岸ですとかそういう海の公園が指定されるようになってきます。それから国定公園主体では大都市の近くにいろいろなりクリエーション主体の国定公園が出来てくるという時代があります。

ところが環境庁が出来る頃から、森林生態系という事がポイントになりまして、先ほど言えばシーナリーをもう少し深く追求するという公園になってくる訳です。目標は景勝地から生態系になってまいります。瀬戸内海を例外としますと、戦前の公園というのは湖か山岳だと思って頂いていい訳です。昔は山岳という、地形、いわゆる顔のほりのようなものでしょうね、そこに魅力を求めた。そして戦後になってまず海、それから環境問題に関心を持つようになって、森林という所にやってくる訳です。

そういう変遷がありますから、たとえば釧路湿原は国立公園で一番新しいんですけども、やはり湿原というのはどう見たって風景としては芒洋としていて、見るということからは魅力も薄い所。私が阿寒に居た時(昭和40年)に本省に行って、「釧路湿原こそ国立公園。」と言ったら、「バカ、あんなものは造園屋が技術を振るうところは何にもない。どうやって見せて感動させるんだ。」と馬鹿にされたもんです。やっと、生態系だとか鳥だとか湿原にいるいろんな野生生物を見直す時代になって、釧路の価値が見えてくる訳ですけども、残念ながら20数年前に比べて指定したい公園の区域は(私が計画課長の時に指定したんですけども)、昔思っていた所の半分ぐらいしかありません。それだけ農地造成のために水が抜かれてしまったのです。そういう面から言えば、生態系という「森を重要視するような自然保護の視点」が入って始めて、そこに住んでいる人間以外の生き物と言いましょか、大型のは乳動物であり鳥類であり昆虫というものにまで目が向くわけです。

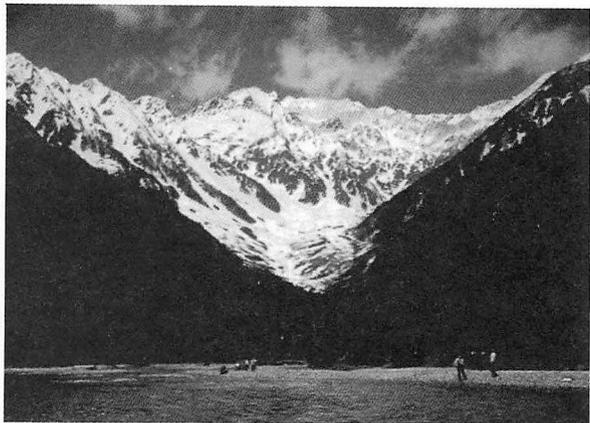
もう一つ加藤さんの話にあったいわゆる開発の歴史で言いますと、昭和35年から40年ぐらいにかけてはロープウェーが盛んに作られます。それから昭和40年から45年ぐらいは道路、有料道路の時代ですね。千里浜にも有料道路はありますけれども、いわゆるスカイライン、県の道路公社とか企業局で道路を作ります。これは観光開発、地域開発という目的で国立公園なり国定公園の風景を見せようという事ですから、風景のいい所を通るわけですけども、ロープウェーにしる山岳道路にしる、森の中では面白くもない。だから森林限界に出て、眺望のいい所から山登りをやるという事になるんだろうと思います。大雪山も残念ながら昭和40年頃に層雲峡から黒岳に、湧駒別から旭岳の姿見の池と二つのロープウェーが森林限界を越えた所まで行く訳ですね。そこから、600~700mの山登は、森という暑苦しさやうとうしさの無い所を登って行く訳です。今は森林浴という言葉があって、「そういう所こそ意味があるという風になってきている。」と思います。

白山国立公園の特長—21世紀に向けて

以上のように全国的な並べ方をした上で申し上げますけれども、じゃ白山はどうであったかという時に、石川・福井・岐阜・富山の4県にまたがりながら、しかもルートとしては加賀の禅定道とか越前、美濃とかある訳ですけれども、白山という名前で決して他のものと野合しなかった。この白山という名前以外どうしても他とくつつくものはなかったと思います。国立公園になったのは随分後かも知れませんが、なにせ白山という唯一で単独の名前を持ち続けた公園であります。

立山と富士山とで、いわゆる日本三名山と言いますかね、越中おわら節に、「越中で立山、加賀では白山、駿河の富士山三国一だよ」とありますね。立山という国立公園の名前はありませんよね。で、立山が大正11年に国立公園の候補地になった時には、白馬・上高地と一緒に合わさって中部山岳という名が付けました。これは造語なんです。本来なら北アルプスという事でしょう。

立山一つでも国立公園に成り得るでしょう。しかし、立山はやっぱり剣岳とか薬師岳とか後立山とかと、どうしても一緒になければ形を成さないでしょう。白山ももちろん剣ヶ峰、御前峰だとか大汝峰だとか言えばそうなんですけれども、一つの名前として白山というのが存在している。富士山も戦前から富士箱根といい、両方の名前をつけた形で国立公園だったんです。後に伊豆がくつつくというふうに、3つの名前のジョイントになる訳で、単独で国立公園として名前を持っているというのは非常に素晴らしいと思います。



◎中部山岳国立公園(撮影：望月 隆)

利用のあり方の検討をした時に、いろんなデータ、たとえば植生図ですとかあるいは1キロ四方の間に道路が何本入っているかという分析をしまして、それを国立公園、国定公園ごとに、打ち出したりします。どうしても十和田八幡平とか雲仙天草だとかでは、雲仙の性格のものと天草の性格のものが一緒になってしまいますので公園の性格が非常にわかりにくい。ところが白山や知床や大雪山という所になると、その動物の豊かさや植生の豊かさや道路の少なさがそれなりに原始性も持っていることとか、そういった性格は非常に明確に出てまいります。

合従連衡とか名前をベタベタくつつけたとか言いましたけれども、そういう当時の陳情型、そして名前さえつけばなんとか地元の人が納得する、観光の看板にしてきた時代から、21世紀はそれぞれが分離してしまう時代だと予測している訳です。これはソビエトにしろユーゴスラビアにしろチェコスロバキアなどの民族独立というのに非常に似ていると思います。そもそも性格の違う公園が名前を一緒にくっつけている時代と言うのはいつまでも続かないだろうと思うわけです。それは国立公園にする時に、各省と協議をしますから、「そんなに沢山の国立公園を作られては困る。20なら20に区切れ。要件は3万ヘクター

ル以上。」などというふうには各省から責められる訳です。そうすると近くにあるあれとこれとをくっつけようとしたり、海と山をくっつけたりいろんな事をして国立公園を増やしたという事がありますが、今の28カ所から国立公園はなかなか増えないだろうと思います。今後は北方領土が還ってきた時に国後なり択捉にそういう公園構想を持つ位だと思いますけれども、そうだとしますとこれからはそれぞれが個性を持っている公園として離縁をしたいというふうになってくるだろうと思います。屋久島なんかは後から霧島にくっつけて霧島屋久になったんですけれども、屋久島というのは白山と同じように独立していて、固有の自然の豊かさと変化があります。そういう所では屋久国立公園とか屋久島国立公園に変えたいという事を言い出している訳ですね。

白山は元々一つのまとまりだったんです。よく会社ではC I化、コーポレートアイデンティティといいますね。それ式で言えばC I P、コーポレーション・アイデンティティ・パークって言いますか、そうなります。その時、特色を活かした公園作りをすることにより、白山は今後の日本の国立公園のモデルになることが出来ます。

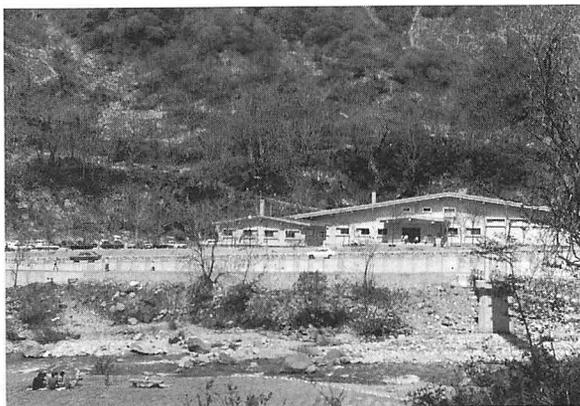
もう一つは、白山自然保護センターができて来年で20年だと思いますけれども、始めから自然保護センターという組織を考え、その組織の中に研究施設を中心にしながら展示もするという普及広報の活動、そして管理の部門と、こういうものを合わせた先見性のあることをやられた。以前、知事さんが「地方自治体として国立公園に望むこと」という講演をされた時に何も見ないでおっしゃったのが、「白山にはイヌワシが40から50羽います。20番以上いるんでしょうかね。それは1番のテリトリーは約5キロ四方なんです。サルは500頭ぐらいいます。大体のサルの家系簿があるんです。クマは400頭から500頭います。カモシカは2,000頭から3,000頭います。」ということをすらすらと言われました。

県知事がこういう自然の事を全部頭の中にインプットして、「多少はそういう研究の成果を公園の管理にも活かしたい。しかし、国にお願いするとなれば本来、研究は国がする事だと思います。公園の管理だとか、あるいは観光客の人たちに対応するビジターセンターだとか博物館だとかは県がやる事かもしれないけれども、しかし研究というのはその成果は全国で使ってほしいし、あるいは世界に使ってほしい事なんだから、やっぱり私たちは15年前から自然保護センターというものを作ってきたけれども、国が是非そういう研究に乗り出してほしい。」と、知事はおっしゃっていました。これから白山自然保護センター、特にその中で研究部門をどういうふうに活かしていくかが、21世紀の白山国立公園を考える上で重要だと思います。白山が他の公園と一緒にないだけに、そのアイデンティティというものを活かして行ける事に成るのではないかと考えております。ちょっと時間が過ぎましたけれども、この辺で終えたいと思います。

(文責：白山自然保護センター)

◎写真出典：「自然への招待」、

(財) 国立公園協会(1989)



白山自然保護センター中宮展示館

たより

今年は、白山国立公園が指定されて30周年になります。これを記念して、白山国立公園指定30周年記念行事実行委員会（環境庁・石川県・白峰村・尾口村・吉野谷村・白山観光協会）が結成され、色々な行事が催されています。その一つとして、7月23日に、県立社会教育センター（金沢市本多町）において講演会が開かれました。講師には、作家の加藤幸子氏と、環境庁の瀬田信哉氏を迎え、白山の自然や国立公園について話してもらいました。今回の「はくさん」では、両氏の講演の要旨を紹介させていただきました（参加者は350名）。この講演会に先だち、7月9日・16日に当センター主催の「白山の自然講座—お花畑と白山火山—」が開かれ、両日とも約150名の参加者がありました。

8月上旬には、同じく30周年記念事業の一つとして、自然観察会「白山登山」を開催しました。今年は例年と内容を変えて、8月2日・3日に1泊2日の一般コース（上り；砂防新道、下り；観光新道／参加者47名）を、8月2日～4日に2泊3日の健脚コース（上り；砂防新道、下り；中宮道／参加者7名）を、それぞれ実施しました。10月4日にも、30周年の記念事業として、岩間噴泉塔で自然観察会を開催しました。ブナ林を歩いて噴泉塔群を見たり、記念にブナの苗木を植樹したりしました（参加者は41名）。

前号（20巻1号）の「たより」でお知らせした通り、30周年記念事業の一つとして、白山の自然を対象とした写真コンテストも開催されました。全部で469枚の応募があり、10月14日に審査会が開かれ大賞他が選定されました。入賞作品は、次号の「はくさん」で紹介する予定です。



夏の自然観察会（中宮道）

目 次

表紙 剣ヶ峰	東野外志男.....	1
白山国立公園指定30周年記念講演会		2
講演要旨		
「白山の自然に寄せて」	加藤 幸子.....	3
「21世紀の国立公園」	瀬田 信哉.....	9
たより		16

はくさん 第20巻 第2号（通巻84号）

発行日 1992年10月31日（年4回発行）
編集発行 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確 文 堂